

校長室だより～和光高校今昔 第13号 H26. 8. 1

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

伝説となった臨海学校

夏休の真っ最中であるが、授業確保・行事精選のためか大きな行事はどこの高校でもほとんど見られず、生徒募集行事全盛の今日この頃である。ただし浦和・蕨・熊谷などいくつかの学校では伝統的行事として臨海学校が実施されている。かつて和光高校も臨海実習を実施した学年があった。昭和49・50年と52年の3年間と昭和55年のあわせて4回行っている。臨海実施の契機は、内藤清・星野隆之の両先生方の綿密な調査により3期生から山ではなく海になったと聞く。当初は伊豆の大浦海岸がその場所であった。高校入学後、夏の最大の行事として臨海学校は大きな意義を持っている。今でもそうだがプールのない和光高校なので1学期期末考査の直後から朝霞高校のプールを借りての特訓が始まる。泳力検定も行われ万全を期して海に臨む。

結果的に最後の臨海学校となった昭和55年の9期生は7月16日から3泊4日の日程で千葉県内房岩井海岸に向かった。この学年から2クラス増えての10クラス、総勢453名の生徒がバス10台を連ねて千葉に向かう様子は中々勇壮であった。今のように高速道路などほとんど未整備の時代であった。さらにこの時は、「助教」として筑波大学ラグビー部の猛者たちに手伝っていただいている。そのうちの一人が当時3年生であった石丸隆一教諭であったのは興味深い。

この年に創刊されたPTAだより第1号に臨海学校の報告が掲載されているので紹介する。おそらく学年主任であった吉田道行先生の寄稿であろう。

梅雨明け宣言のまだ出ない7月16日に入学以来初めての大きな行事である臨海学校が、三泊四日の日程で、千葉県富山町岩井海岸で開校された。バス移動中の生徒は、期末試験が終わった解放感とこれから始まる臨海学校への期待に目を輝かせていた。



現地ですっそく開校式が行われ、そのあとすぐに各班……泳力に応じて白帽（上級）、青帽（中級）、赤帽（初心者）に分かれ、各帽子は12名前後の班に分けてある……毎に水泳訓練が行われた。四日間、天候にはさして恵まれず、好い日でも薄日がさす程度であった。このような悪コンディションにもかかわらず、皆元気に訓練に励み、三日目の遠泳（1,5 km）には、白帽青帽が参加し、九割以上の生徒が完泳した。遠泳を岸で見守っていた生徒たちが完泳した生徒を出迎える様子は感激に充ち溢れていた。

同じく「若樹」からの一文である。

わが校はプールがありません。ですから臨海学校に備えてのプール実習を朝霞高校で行いました。臨海学校の思い出と言えば、寒い中での遠泳やそのあとに食べたお汁粉の味、あのお汁粉は最高においしかったです。ビーチファイヤーは少し雨に降られましたが、みんなが燃えていたのであまり気になりませんでした。最後の夜は遅くまで起きて友達と話すなど思いで多き四日間でした。



今でも記憶しているが、安全面の配慮、生徒指導、生徒の充実感と達成感・成就感などすべてにおいて最高の行事であった。9期生のまとまりはこの臨海学校から始まったとも言えよう。ただし、さきだつ職員会議では

臨海か林間かで大もめにもめ、喧々諤々・甲論乙駁……12人の新任教諭は唾然としてそれぞれ顔を見合わせていた。採決は全くの同数、司会であったM先生が苦渋の表情で最後に「原案支持」を示しようやく決まった臨海学校であった。しかしながら、いざ実施が決まってからは見事な協力体制。相変わらずブツブツ文句を言うものは皆無ではないがほぼ全校を挙げ成功に向けて邁進したものだ。

学校の持つ体力が低下し、残念ながらこれ以降の臨海学校は実施されていない。いつの日かこの時の感動をもう一度味わいたいと思っている。私の22歳の夏の思い出である。